



The Royal Photographic Society

Patron: Her Majesty The Queen. Incorporated by Royal Charter

NEWS LETTER

第26号 2013/06/27

発行所 英国王立写真協会・日本支部
〒107-0052
東京都港区赤坂9丁目1番7号
赤坂レジデンシャルホテル482号
電話：03-6721-1590
FAX：03-6721-1590
email: rps-japan@nifty.com
発行人 三宅善夫 編集人 川村賢一

<http://www.rps-japan.org>

新理事長ごあいさつ



三宅 善夫

昨年9月英国王立写真協会日本支部の改革についての理事会で、林喜一前理事長から、理事長にご推薦を受け、第6代目理事長の大任をお引き受けすることになりました。

これまで事務局長を務めてまいりましたので、林理事長の築いて来られた体制を一層活動的なものにする為のコーディネーター（理事会の調整役）として、RPS J発展のために微力を尽くしたいと思います。

日本にある他の写真協会と異なり、英国の本部を中心に世界各地の支部とつながっており、会員数は2013年3月末で11,015名に達しております。

その技術的評価が世界水準であることを自覚し、世界への挑戦を常に念頭に置いて、皆様も活動を続けて頂きたいと思っております。

幸い英国本部との関係はとても風通しのよいものになり、距離も時間も短くなりました。皆様の日常の作品制作が、そのまま世界につながっていると言っても過言ではありません。

リレートーク、撮影会、勉強会などを通じて、日本支部が仲睦まじい会として発展してゆくことを念願して止みません。

皆様から積極的にご提案を戴きますよう、お願い申し上げます。

幸いにして、四条様（初代理事長のご子息）のご好意で日本支部独自の事務所が、赤坂に出来ましたので、皆様で小会議や自由な語らいの場として活用して下さることが、創設者青木先生のご恩に報いることになると思っております。

日本支部が成長し、海外支部の中で名実ともにNo.1になれますよう努力を重ねて参りますので、皆様のご教示とご指導、ご協力をお願い申し上げます。

（2013年5月20日）

第11回支部写真展開催

3月1日～7日まで、昨年同様、東京銀座のフレームマンエキジビションサロンにて、支部写真展を開催した。入場者数も昨年同様700名超と推定。

ここ数年「feel British」をテーマに、会員皆さんがどのように解釈し、何に英国を感じたか、一堂にそろうとなかなか興味深い。オーソドックな英国風景ばかりでなく、国内外で撮られた様々な被写体が集まってくる。思いもかけない対象物もあり、視点を変えればいくらでもありそうだ。

今回は、担当者の引き継ぎなどもあり、準備が少々後手に回るなど、課題も見えてきた。来年は、さらに充実した写真展として、レベルを高めていきたい。

写真展の様子については、写真と手紙で本部に報告し、本部からは祝辞のメールが届いている。



長崎歴史文化博物館巡回展（次頁）

支部写真展 長崎巡回展

第10回リレートーク 「私と写真、私の写真」



昨年は実現出来なかったが、今年も、5月22日～6月2日まで、長崎歴史文化博物館ギャラリーにて、巡回展を開催。

昔の長崎奉行所を復元した建物は、幕末の歴史ドラマをより身近に感じさせる。時代

劇でよく目にする「お白州」を奉行になった気持ちで見学することが出来るユニークな施設だ。

長崎のユニークな歴史と文化が凝縮されていて、見学者が絶えない。とくに修学旅行生の多いこの時期とも重なって、延べ4000人との報告があった。

待遇面でも申し分なく、今後も開催を求められていて、大変ありがたく、今後も交流を深めていきたい。



スイス ユングフラウ 菅田芳文

昨年9月29日、東京六本木の「霞会館」にて開催。
菅田会員は、茨城県水戸の生まれで今年83歳。前回紹介した斎田和夫会員とは、なんと小学校の同級生です。

静岡済生会総合病院の循環器科の現役医師として活躍されている傍ら、海外を含め数多くの写真を撮られ、個展も開催し、写真集「樹のこえ」を出版。今回、前半は自らの写真について、後半は医学雑談としてお話しいただいた。



菅田芳文

「私と写真、私の写真」

同級生の斎田さんは、写真の世界に進まれたのですが、私の方は医者道に進み、写真とは縁がありませんでした。

水戸にいたころは、雑木林を歩くのが大変好きでした。とくに秋から冬にかけては、青空の下、落ち葉の中を歩くのが好きでした。その後、木の写真を撮るのが大変好きになりました。そのことについては、「市医しずおか」に、「樹のこえ」という雑文を載せていますが、私にとって、この雑木林の光と影は、今にして思えば「原風景」のひとつとなっているようです。

とくに、岩手県北部の安比高原に残雪のブナ林を訪れた際、根回りの雪を自ら吸い上げる地下水の温度で溶かしながら毅然と林立する様に感動し、ブナに対する想いが深まりました。

あるときウィーンで学会があり、足を伸ばしてスイスのユングフラウで撮った写真が全日写連の静岡県展に入選しました。落選した写真に納得がいかず、審査員に直接尋ねたところ丁寧に解説していただき、これが縁で全日写連に入会し勉強を重ねました。

その後も山の写真を撮り「稜線を行く」では朝日新聞社賞を受賞しました。翌年「灯ともしころ」という作品でまた特選に入りましたが、そのときのプレゼンテーターがなんと林理事長でした。それが縁で、アルプスシリーズで個展を開いたときにも来ていただきました。

その後、足を捻挫して山歩きが出来なくなってしまいました。骨折よりもたちが悪く、未だに山道は辛いです。それで撮影対象を替え、オーストリアのインスブルック、パリやウィーン、プラハなどの街の風景を撮るようになりました。階段や石畳、石造建築などの光と影が好きです。

パリのリュクサンブール公園などでは、人物も撮りましたが、何か日本より絵になると感じます。

毎年静岡で、「樹のこえ」、「ヨーロッパ・アルプス」、「ぶな賛歌」などのタイトルで個展を開いていますが、新聞にも取り上げていただき、ありがたいと思っています。これからも「老樹の青春」(長年天声人語に健筆を振った荒垣秀夫のエッセー)にあやかりつつ、更に撮影を続けて行きたいと望んでおります。

「医学雑談」(要約)

リンパ球の一種であるNK細胞(免疫細胞)の働きで、通常はガンになりませんが、増殖力の極めて強いガンであったり、免疫力が落ちると発症します。高齢になると免疫力が落ちますが、老化以外にも、放射線を浴びるとか、大きな病気とか、タバコでも免疫力が低下します。正常な細胞に傷をつけ、その傷をもとにガン細胞が出来てしまいます。

今日の死亡原因第1位がガンです。豊臣秀吉も武田信玄も胃ガンで亡くなったと言われていますが、昔は寿命が短く、ガンになる前に他の病気で亡くなるが多かったのです。今日では、ガンの早期発見で、かなりの確率で治すことが出来ます。胃ガンに関しては、日本は最先端で、内視鏡でごく初期に排除することが出来ます。

ガンの薬ですが、これまでの毒性の強い薬は、正常な細胞にも影響を及ぼし、体力を弱めてしまいます。ガンの増殖する力を押さえる薬もありますが、これにも副作用があります。

さらに、『免疫療法』があります。たとえば、丸山ワクチンです。誰にでも効くものではないですが、患者さん自身のリンパ球を使って、免疫力を高めることが出来ます。東京大学などでは、すでに治療に応用されていますが、まだ大変費用が高く、保険適用にはまだ数年はかかると思います。

ある実験では、毎日2週間「落語」を聞かせたところ、あきらかにNK細胞の力が増えています。逆に何か不幸があったり、ストレスがあったりで、落ち込むと、NK細胞の力が非常に弱くなります。毎日明るく過ごしている人との差は歴然で、そうした気持ちもとても重要です。

だいたい85歳以上の超高齢になるとガンがあっても、自然死に近い状態で、命を全うすることが出来るようです。

次に脳卒中についてですが、脳卒中が減った最大の要因は、高血圧治療で、脳出血が大幅に減少しました。その反面、脳梗塞が増えてきたのも高齢化の影響で、認知症も同様です。

もうひとつ脳塞栓というのがあり、長嶋監督が良い例です。心房細動(不整脈の一種)によって、心臓の一部によどみが出来、血の塊が何かの拍子で剥がれて脳に運ばれ、詰まってしまっ起きてくる病気です。「人は血管とともに老いる」という言葉がありますが、血管年齢が重要です。

糖尿病は、とても怖い病気で、網膜をはじめ、全身の血管をダメにし、人工透析を受けている人の半数以上が、糖尿病が原因です。さらに、足の動脈硬化症(昔エノケンがこれで足を切断)など様々な病気を引き起こします。糖尿病を知るには、血液検査が必要です。

脳梗塞は、発病して3時間以内に、血栓を溶かせば、ほとんど直ります。なるべく早く病院に行くことが重要ですが、前兆がなかなか分かりにくいので、チョットおかしいと思ったら、すぐ大きな病院で見てもらおうことをお勧めします。

肥満になると、まず糖尿病になる確率が高く、次に脂肪肝です。食生活を改善し、運動する必要があります。

運動すると、血行がよくなり、脳の働きもよくなるので、仕事や勉強もはかどる。また、下半身の筋肉がつくと、高齢者の転倒防止にもなり、人間の身体の中で最も大きな筋肉は、太ももとおしりですが、ここが水分の貯蔵庫となり、脱水の予防にもなります。さらに代謝もよくなり、これによって、エネルギーが有効に使われます。

最後に、足は第2の心臓と言われ、足がポンプの役割をして、血液を押し上げる働きをします。長時間同じ姿勢をするような場合は、ときどき足を動かして、血液がよどまないようにすることが大切です。

以上で、私の話を終了します。



京都貴船



安比高原



ウィーン



プラハ

「国際写真サロン」見事入賞！

昨年末、メジャーな国際展として知られる「国際写真サロン」(朝日新聞社・全日本写真連盟主催)で、国内外から総計9295点の応募の中から、石橋哲子会員が、見事審査員特別賞の一人に選ばれた。

これはまさに快挙ですので、ここに紹介します。

「夕焼け空の中にブランコに乗って、そのブランコの裏側に唇が見える。創作と思うが素晴らしいセンスが唇物語を生み出している。色合いもよく、作者の仕掛けの意外性が我々の心をとらえた作品。」と評されている。



『ヒーロー』: 石橋哲子

支部事務所開設

この度、四条様のご厚意により、東京赤坂のレジデンシャルホテルに、支部独自の事務所を開設することが出来た。場所は、フジフォトスクエアのある六本木の東京ミドルタウンガーデンの北に位置する。

数名の会合などにも利用可能だ。

今回、寄贈していただいた、田村会員の絵画作品「富士山」も事務所に飾らせていただくことになった。



赤坂レジデンシャルホテル



作: 田村暉昭

百里基地撮影会

5月23日、本村会員の企画により、茨城県にある航空自衛隊百里基地の見学撮影会が実現した。最近開港した茨城空港に隣接し、テレビドラマの撮影も行われている。もとF15戦闘機隊長の佐藤3佐と広報官の案内で、実物のF15に触れ、発着陸を見学。写真的にはセキュリティの問題で制約が多かったが、現役パイロットの生々しい話に接し、ユニークな企画を楽しんだ。



上野彦馬の墓参りに感動

5月末、長崎での写真展に合わせて、はじめて長崎市を訪れた。あいにく長崎はその日も雨だったが、坂本龍馬の足跡をたどって山道を散策をしていたところ、偶然にも上野家の墓地へのアクセス路に遭遇した。3尺にも満たない細い道をたどると、日本における写真の開祖である上野彦馬とその父の墓にたどり着いた。前日、彦馬関連の写真資料館を訪れていたの、より感慨深かった。彦馬が写真スタジオを開設したのは、王立写真協会の発足から、約10年後だ。(川村)



上野彦馬の墓(右)

(編集後記)

スムーズに発行できず、お詫びの言葉もありません。今回は、ここ数年懸案となっていた諸問題を、林前理事長を中心に改革案としてまとめ、三宅新理事長にそのバトンを託し、新たな船出として節目となる号です。支部活動や、会員の幅広い活動の一端を紹介し、応援します。不定期発行のニューズレターは記録ですので、ニューズ速報は是非ブログをご覧ください。(川村)